

# 責められるのは 被害者なのかな

女性が声を上げにくい構造が痴漢を生む

被害者に「肌の露出を控えろ」と言うが、加害者に「なぜ痴漢をするのか」とは聞かない。

痴漢を見ないようにしている社会で、痴漢が減るはずはない。

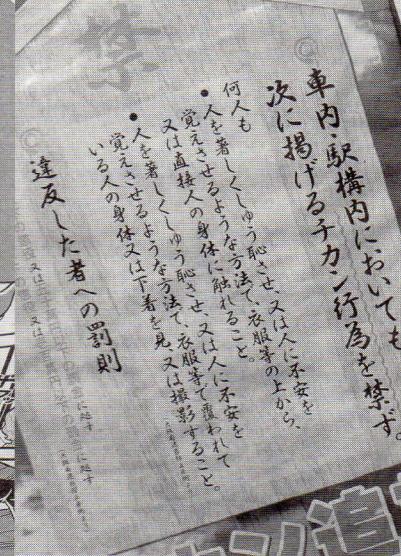
あなたの油断が… 肌の露出  
が多い

あなた的心掛け！ 上着を着  
る

電車内痴漢防止ポスターに躍  
り出た。被害に遭いたくないなら「肌の露  
出」を減らせ、というイラスト  
入りの啓発。そこには、被害に  
遭う遭わないは女性次第である、  
という意識が透け  
て見える。

2012年の電車  
内の強制わいせつ  
認知件数と、迷惑  
防止条例違反のう  
れ

電車内や駅構内には、痴漢防止ポスターが目立つ。東京ポスターがボスターの種類が多く、もはや女性専用車両の目印である印象だ。一番下の写真のように漫画を使つたポスターもある。



す男がいても仕方ない」という意味にもとれる。

痴漢犯罪は「満員電車」で「肌の露出の多い女性」によって「性欲が誘発されて」起るものであり、そういう「性的異常者」が一定数いるのは「仕方ない」。他の犯罪とは違う独自の論理が世間に浸透しているのではないか。被害者の服装や行動ばかりが取り沙汰され、加害者の生態に触れないのは、その表れではないのか。

原宿カウンセリングセンターの信田さよ子さんは、加害者の複雑な心理を分析する。

「たとえ性衝動があつても、普段は隣り合わせた女性を触らない。そこを踏み越える加害者は、自分の行為が相手に一生の傷を残す重大なことであると分かっていない。むしろ女を喜ばせてみるとまで思つている加害者も少なくありません」

痴漢の加害者である会社員のタナカさん（男性、50）も実際、痴漢の加害者である会社員のタナカさん（男性、50）も実際、そう思つていたといふ。

「相手も一緒に楽しんでる、くらいの気持ちでした」

高校生の頃から約30年間、電車内痴漢を続けた。「通勤の移動時間を利用する感覚」で日常化していたといふ。毎朝同じ電車に乗る特定の女性に1年間痴漢行為を続けたこともあつた。

何度も逮捕された。警察の取り調べでは、「被害者はミニスカートだったのか?」「性欲がたまっていたんだろ?」。そう誘導された。「なぜ痴漢をしてしまったのか」と聞かれることは一切なかった。勾留48時間以内に認めるとそれで済んでしまう。立件されても、弁護士を通じて示談金を払うだけだ。

「何百万円も支払い、職や妻も失つた。それでも自力ではやめられなかつた」（タナカさん）

## 空いている電車も危険

11年に警察庁が発表した「電車内の痴漢撲滅に向けた取組みに関する報告書」での被疑者調査によると、なぜその被害者だったのか（なぜその女性を狙つたのか）という問いには、「偶然近くにいたから」と答えたのが50・7%と圧倒的多数で、「服装が派手だったから」と答えたのはわずか1・8%。動機に至つては「痴漢をすると興奮するから」が49・8%を占めた。派手な服装に興奮させられるのでなく、痴漢行為そのものに興奮を覚えていることが分かる。

「満員電車」も原因にはできない。先述の痴漢防止ポスターにも、防犯のために立たないほうが多い場所として「ドア付近」「改札口」に近い場所（痴漢の逃げ道になります）」を挙げている。

満員電車よりむしろ空いている  
ほうが逃げやすいため、加害者  
にとつては好都合な場合もある  
と言える。

大阪にあるカウンセリングオ  
フィスAXIAの衣川竜也代表  
は、加害者をこう分析する。

「共通点は、ストレスを自覚し  
ないほど抱え込む性格。またパ  
ートナーなど同年代以上の女性  
全般に対して『怖い』という感  
情を持つ傾向も強い。そのため、  
加害者自身が恐怖心を感じにく  
い女子高校生がターゲットにな  
ることも多い」

加害者の性質や事実を見ない  
ことにしたままでは、ますます  
痴漢被害が増える一方ではない  
だろうか。性犯罪者やその予備  
軍を専門的に治療する民間団体  
「性障害専門医療センター」(S  
OME C)は、外来治療によつ



て加害者と向き合っている。福  
井裕輝代表理事は性犯罪被害者  
のカウンセリングをしていく中  
で、「被害者の心を癒やすには  
加害者へのアプローチも必要」  
だと考えたのだ。

### 「いつそ診断されたい」

前出のタナカさんは「もし治  
るのであれば治したい」という

思いでSOMECを訪ね、月2  
回のグループカウンセリングに  
1年間通った。1回1万3千円  
のカウンセリングでは、自分の  
気持ちをメンバーに話したり、  
加害者役、被害者役をロールプ  
レイする様子を撮影した動画を  
見てメンバーと話し合ったりす  
るなどで、被害者の感情を学ん  
ていく。プログラムを終え、こ  
う話す。

「今は女性がどれほど恐怖を感  
じていたか想像できるようにな  
り、自分がしたことの重大さに  
押しつぶされそうになる時もあ  
ります」

会社員のスズキさん（男性、  
20代後半）もこのカウンセリン  
グを通じ、被害者へ自分がどん  
な影響を与えていたのかを理解  
できるようになつた一人だ。

「悪いことだと分かつてはいる  
し、痴漢行為をしても特に満足  
感もないのに、続けてしまう。  
いつそのこと、病名があるなら  
診断されたいと思った」

SOMECに通い始めた頃は、  
女性の性暴力の問題に多く携  
わっている雪田樹理弁護士は、  
「被害女性が声を上げられない  
背景には、明治40年から刑法が  
変わっていない現実がある」

「最初は『今、どんな気持ちで  
すか』と聞かれても分かりませ  
んでした。今まででつらかつ  
たことは?』と聞かれても、何  
も浮かんでこないんです」

電車内にいる女性のことも  
生き物ではなく、どんなこと  
をしてもいい、意思のないぬい  
ぐるみのような認識」だった。

カウンセリングを通して自分の  
意識を掘り下げて半年ほど経つ  
た頃、やつと「なぜ痴漢をして  
はいけないのか」が自分の腹に  
じていたか想像できるようにな  
り、自分がしたことの重大さに  
押しつぶされそうになる時もあ  
ります」

### 「痴漢冤罪による隔絶」

スズキさんはこうも言う。

「逮捕されるまで相当な人数の  
女性に加害行為をしたが、声を  
上げる人は一人もいなかつた」  
もし初めて触った女性が、大  
声を上げやすい空氣づくりをし  
たほうがよいのではないだろう  
か。そしてポスターには「痴漢  
は犯罪です」と同時に「痴漢行  
為は治る可能性があります」と  
書いて、加害者に矯正プログラム  
の存在を教えるが、痴漢撲滅への近道なのではない  
だろうか。

（文中カタカナ名は仮名  
と指摘する。）

「当時は強姦であつても夫への  
貞操義務を果たさなかつたとい  
う理由で被害女性が非難された  
時代。その影響から、現在も裁  
判所では加害者の行為よりも被  
害者がとつた行動、つまり『な  
ぜもつと抵抗しなかつたのか』  
ということに焦点が当たりがち  
です」

「露出の多い服を着るな」と、  
まるで痴漢被害に遭う女性に非  
があるように言われ、「一生治  
らない異常者」という痴漢加害  
者のイメージと、「痴漢冤罪」  
に関する白熱した報道により、  
被害者、加害者、大多数の関係  
ない人たちは隔絶される。被害  
女性が声を上げにくいのは当然  
であり、むしろ声を出させない  
ような社会構造になつてている。

女性に「被害に遭わないよう  
に気をつけよ」と啓発するより  
も、「大声を出して助けを呼ん  
で」「恥ずかしがらずにドアを  
叩いて暴れて知らせて」などと  
声を上げやすい空氣づくりをし  
たほうがよいのではないだろう  
か。そしてポスターには「痴漢  
は犯罪です」と同時に「痴漢行  
為は治る可能性があります」と  
書いて、加害者に矯正プログラ  
ムの存在を教えるが、痴漢撲滅への近道なのではない  
だろうか。